「かいづか家族の日」作品コンクール

問合せ先　社会教育課☎072－433－7125

市では、11月の第３日曜を「かいづか家族の日」とし、今一度、家族の大切さを見つめ直す取組みを実施しています。

料理コンクールでは、市内在住の小学４年生～中学３年生と家族の２人１組を対象に「貝塚産の食材を使ったスイーツ」をテーマにレシピを募集。書類選考を通過した５チームが11月17日実技選考に出場し、腕をふるいました。

エッセイ・写真コンクールのテーマは「家族」。合わせて176点の中からエッセイ・写真各部門10作品が選ばれました。

市は平成30年に「あったか家族都市」宣言を制定しました。今後も家族のありかたや地域の結びつきの大切さを改めて見つめることができるような「かいづか家族の日」の取組みを推進していきます。

料理コンクール表彰式

料理部門 優勝

安枝麻衣さん
智聖さん（中央小６年）

料理コンクールを毎年親子で楽しみにしています。今回で３回目の出場ですが、やっと優勝できて本当にうれしいです！

「いろんな食感が楽しめる！かぼちゃのモンブラン」

講評

料理コンクール審査員　安場竹広さん
（辻調理師専門学校西洋料理助教授・市内在住）

皆さんが非常にレベルの高いお菓子を作られていたことにとても驚きました。お菓子は想像以上に人を笑顔にします。

これからも色々なお菓子を作って人々を笑顔にしていただけたらいいと思います。

講評

料理コンクール審査員　安場昌子さん
（辻日本料理マスターカレッジ教授・市内在住）

皆さん笑顔が素敵で、家族でしっかりと話し合いをしながら、日々努力をしているんだろうなというのが伝わってきました。

この貝塚から素敵な料理人やパティシエが誕生することを期待しています。

写真部門 最優秀賞

西出卓さん

３月の春休みに家族で山梨県の浩庵キャンプ場へ行き、夕方たき火をしている時に撮った写真です。

題名「あったかいね」

エッセイ・写真コンクール表彰式

講評

エッセイ・写真コンクール審査副委員長
朝倉康則さん（市内在住のフォトグラファー）

今年も写真がたくさん集まりましたが、どれもすごく良い写真でした。家族の思いを伝えるには、写真にもエッセイが入るイメージで、題名やコメントをしっかり書いていただくことが必要です。私たち審査員はこの辺をよく見ています。

皆さんこれからも大いに自信を持って写真を撮っていただきたいと思います。

講評

エッセイ・写真コンクール審査委員長
吉村萬壱さん（市内在住の芥川賞作家）

今年は「家族とは何か？」という問題を根本から皆さんに考えていただきたいと思い、テーマを「家族について自分が思うこと・感じることなど」に変更しました。その結果、応募数が増え、家族を掘り下げた作品がたくさん寄せられて非常に良かったです。

このコンクールをきっかけに、皆さんもたくさん文章を書いてほしいと思います。

エッセイ部門 最優秀賞

昭和55年の出来事

竹田ひとみさん

私はこの年の秋に嫁ぐ事が決まっていた。就職してから実家に中々帰れずにいた。だから嫁ぐ日までは両親の元で暮らそうと帰郷を決めた。年老いた祖母も喜んでくれた。

季節は梅雨真只中。帰郷間もなく、九州地方を豪雨が襲った。激しい雨は滝の如く降り続け裏山が崩れるのか前の川が氾濫するのかと不安が頭をよぎる。家の中にいても大声で話さないと聞こえない。道路は寸断され電気も電話も止まり山里は孤立した。

真っ暗な夕方、雨合羽に長靴をはいた父が私を呼び「父ちゃんは消防で見回りに行く。お前はもう家の子ではない。よそ様の預かりものだ。何かがあっては先方に申し訳がたたん。あんたを守りたいが守れん。だから自分で命は守れ」父の目は鋭く真剣だった。「裏山の水が濁ったら村の一番高い家に走れ！婆さんも母ちゃんも気にするな」そう言って父は暗闇に消えていった。

私は心細さで震えながら父の言葉を心で繰り返した。裏山の水を何度も確かめたが判断がつかない。時刻は午後十時過ぎ、私は母と祖母に今から避難する事を話した。足の悪い祖母を背負って父の言う高い家を目標に必死に歩いた。母はおにぎりを作るとかわめいていたが無理やり連れて行く。

深夜大雨の中を突然尋ねてきた私達に驚きながらも、ようきたと家に入れてくれた。蝋燭の灯りに照らされ不気味な夜は更けて行った。白々と明けていく朝の有難さは今も忘れられない。山道から懸命に手をふる父を見つけて私は泣いた。

料理コンクール入選５チームのレシピ、エッセイ・写真コンクールの最優秀賞・優秀賞作品は、ホームページをご覧ください